

情報通信審議会 情報通信技術分科会
産学官連携強化委員会（第４回）議事概要

１ 日 時 平成２２年３月２３日（火） １３時１５分～１４時４５分

２ 場 所 総務省 １１階 １１階会議室

３ 出席者（敬称略）

構成員

酒井善則（主査）、高畑文雄（主査代理）、伊東晋、浅野睦八、井上友二、鈴木京子、資宗克行、関根千佳、滝澤光樹、中川八穂子、野原佐和子、武藤泰明、森川博之、山口英、横井正紀、若尾正義

事務局

利根川一（情報通信国際戦略局長）、河内正孝（大臣官房総括審議官）、奥英之（技術政策課長）、山内智生（同課研究推進室長）、藤田和重（同課企画官）、杵浦維勝（同課課長補佐）、他

４ 議事要旨

（１）重点課題についての検討状況

森川専門委員より、資料４－１に沿って、重点課題ワーキンググループでの検討状況について報告があった。

（２）推進戦略についての検討状況

事務局より、資料４－２に沿って、推進戦略ワーキンググループでの検討状況について報告があった。

（３）委員会報告骨子（案）について

事務局より、資料４－３に沿って、委員会報告骨子（案）について説明があった。

（４）ディスカッション

（１）～（３）を踏まえ、ディスカッションとなった。主な質疑は以下のとおり。

武藤専門委員：２点ある。１点は資料４－３（p13）における米国、欧州、日本の研究開発予算の比較年度が違うこと。これでは作成的と見られかねないのではないか。２点目は「民産学官」の「民」の主体は誰なのかということ。国民を巻き込んでいくべきなのだろうが、主体を特定できないと連携できないのではないかと。

事務局：１点目については、現時点で入手可能なデータに基づいたものであり、可能な範囲でアップデートする。２点目について、「民」と加えるのは、これまで技術者サイドの視点を中心に進められてきた研究開発に対し、一般ユーザーの声も取り込んでいくという意図が含まれたものである。

関根専門委員：ＪＳＴでは「民」の主体として自治体、ＮＰＯ、市民団体が参加している。企業ではＰＤＣＡの「Ｐ」と「Ｃ」の段階で、ユーザーに売れる製品かどうか見てもらっている。

山口専門委員：資料４－３（p17）における問題・課題はここ１０～２０年同じものを見ている気がする。資料４－３（p53）での評価や点検はプロジェクト単位では行われるが、全体ではやらないのか。プロジェクトごとに縦割りの評価になっていて、全体での融通が利かなくなるのではないかと。また、芽が出てきたものに対して選択と集中を行うべきであり、ＮＩＣＴは中立性があるから何でもできるというのは、中立性と戦略性のつじつまが合わないのではないかと。

事務局：評価・点検に関しては、分野ごと、プロジェクトごとにＷＧを作り、まずはそこで地道にやっていくことが必要だが、同時に横断戦略ＷＧで全体をしっかりと見ていくことも必要である。また、資料４－３（p32～33）のような形で技術を俯瞰

しようとするともあれもこれもやるべきとなるが、資料４－３（p34）の考え方に基づき、プロジェクトとして重点化を行い、対象を絞って実施していくことが必要と認識。

井上専門委員：「ＩＣＴ研究開発戦略会議」がどういう組織で、どれくらいの権限を持っているのかが見えない。この会議を有効にするために、横断戦略WGはN I C Tの研究成果を深める意味でも、N I C Tの中でやってみてはどうか。

山口専門委員：一度始まると止まらないプロジェクトが量産されることを懸念している。途中で中止することも許容できるよう重点化を図るべく「ＩＣＴ研究開発戦略会議」に独立性なり権限なりを持たせるべきではないか。

森川専門委員：本当に会議だけで機能するのだろうか。動かす人に責任を持たせるような仕組みが必要ではないか。

中川専門委員：横断戦略WGの責任や権限が不明確である。個別のWGのプロジェクトリーダーに責任があるのなら従来とあまり変わらない。横断戦略WGが具体的な目標数値（「グリーン」であればCO2削減量など）を見ながら、研究テーマに沿ってポートフォリオを見ていくなど、役割の明確化が必要ではないか。

酒井主査：それぞれのプロジェクトについて、SCOPEのようなプログラムダイレクターを決めてしまうということか。

森川専門委員：横断戦略WGをN I C Tに作るとすれば、N I C Tの自ら研究に対しても厳しいことを言わなければならない。

横井専門委員：「ＩＣＴ研究開発戦略会議」など新しい体制を作るには、既存のリソースへの上塗りでは機能しない恐れがあり、もう少し議論が必要な部分である。また、今回の報告書で一番大事なのは研究開発に対する危機感である。来年、再来年と我々はより競争力を失うことが想定される中で、もう少し危機感を煽るような書きぶりにすべきではないか。

浅野専門委員：言いつばなしの報告書、掛け声だけの報告書にしてはいけない。過去の報告書でも、優れた研究開発方針を打ち出しており、絞り込んだ重点課題は今回のものと大きく変わらない。今回のロードマップは2010年からスタートしているが、過去からやっている課題であれば、2010年までの総括を踏まえて、これからこうするということを打ち出さないと、過去と同じような報告書になってしまう。

関根専門委員：前回と比べるときれいにまとまっている印象があるが、2点ほど気になる点がある。1点目は資料４－３（第1章）において、データはできれば2009年時点の最新のデータを用いて欲しいということ。2点目は、プロジェクト例として挙げられているものはN I C Tがこれからやりたいプロジェクトに見えてしまうということ。社会ニーズとプロジェクトが繋がっておらず、今回のプロジェクトでカバーできなかった技術はどうするのか。

事務局：資料４－３（p58）は「ＩＣＴ研究開発戦略会議」について、その設計を具体化していくことが必要かと思う。プロジェクトの必要性については、ロードマップの作り方をさらに工夫していく。

井上専門委員：研究開発の一例で言うと、「超高速伝送」は時代と共に技術が変わってきているが、テーマは相変わらず「超高速伝送」である。テーマを大幅に変えるのは難しいが、表現上の工夫は必要かもしれない。

山口専門委員：課題の組み直しなどフィードバックが適切にかかるようにした方がよい。

事務局：社会ニーズとプロジェクトの間にギャップは確かにある。国の研究開発プロジェクトでは中長期的な基盤的技術の開発がメインとなるが、短期的な課題については研究開発というよりユビキタス特区等の実証実験として総務省では進めている。そこが書かれていないがために隙間があるように見えてしまうのではないか。また、資料４－３（p58）の体制図だが、個々のプロジェクトのみで進める形でのいいのかという議論を受け、全体を俯瞰する横断戦略WGができたことと認識している。横断戦略WGが、全体のポートフォリオや課題の見直しを含めて見ていくことで、「ＩＣＴ研究開発戦略会議」全体を機能させていくのかと思う。

酒井主査：そのようなことをもっと明示してもよい。

浅野専門委員：研究開発が長期的な視点でやるということを報告書に書けばよい。また、今回資料４－３（p58）がこれまでの研究開発のプロセスにおける新しい考え方なので、

何をやるかだけではなく、なぜこういうことを提案するのかを入れたらよいと思う。また、第1章「研究開発政策を巡る現状と課題」において現状にしか触れていないが、第2章では課題に触れており、全体のストーリーがうまくつながっていないのではないか。

野原専門委員：第4章の内容が少なく、目次の印象と中身の印象に差がある。第3章では各プロジェクトについて具体的にロードマップ等で時間軸を示しているが、第4章の推進体制との関係が不明確である。また、ロードマップに対しどの時点で見直しをかけるのかも分からない。

事務局：ロードマップは重点課題WGで議論されたものであり、常に社会ニーズや技術の変化によって見直すべきものである。それは報告書のどこかに書かなければならない。

横井専門委員：資料4-3（p52以降）での課題に対して何をするかというメッセージにやや精神論が多い気がする。キーサクセスファクターなど具体的に書けるものは書いていく方がよい。また、議論が資料4-3（p58）の推進体制のイメージのみに行ってしまっているが、この推進体制が必ずしも全ての課題を解決するわけではないので、それ以外にも課題を解決するための実行プランとして考えられるものはあるのではないか。

井上専門委員：我が国の国際戦略の強化という観点から見ると、アジアニーズへの対応の部分が弱いと思う。

（5）その他

次回会合の日程については主査及び両WG主任と相談の上、別途連絡することとなった。

以上